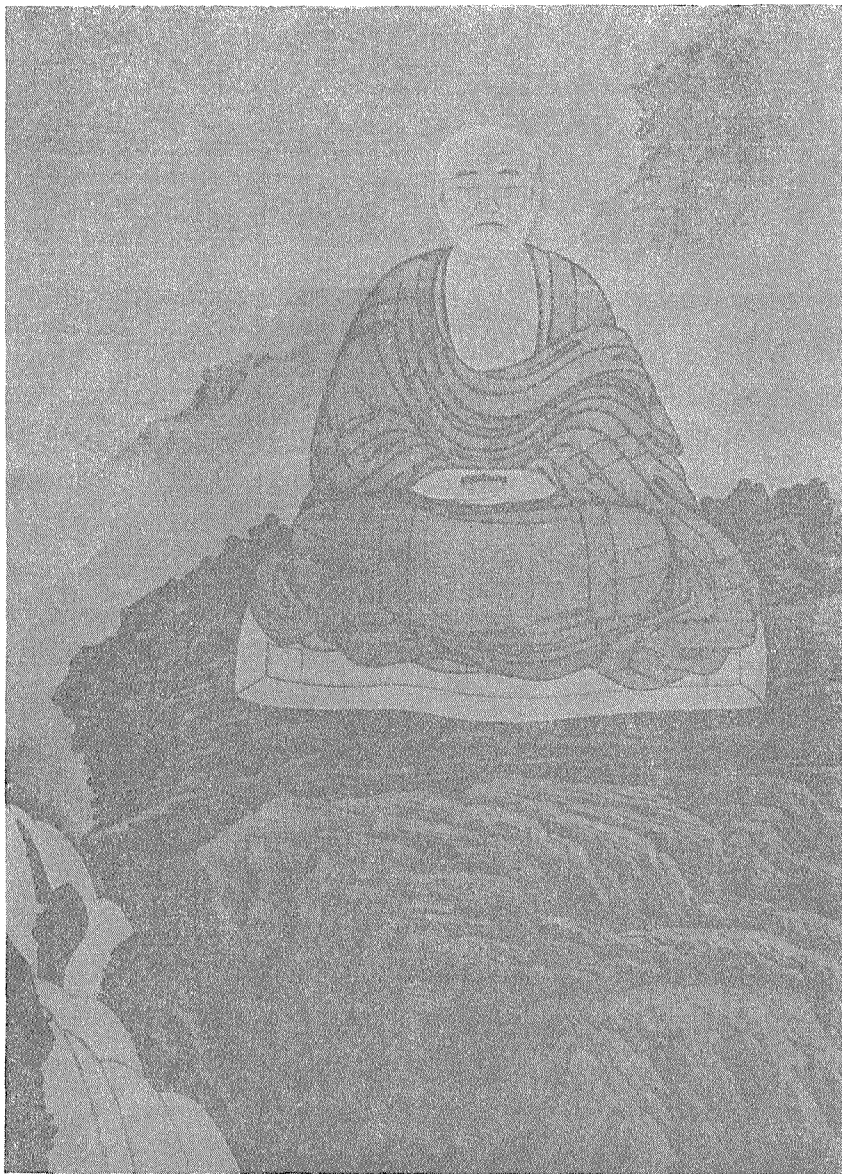


Title	慈雲の梵学
Author(s)	村田, 忠兵衛
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.361-p.370
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80487
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



生駒山中雙竜庵時代の慈雲

巖上にあつて禪座の肖像である。なおこの雙竜庵の建物は東大阪市高井田長
米寺内に移建されて現存する。

慈雲の梵学

村田忠兵衛

Über die buddhistische Sanskrit-Philologie von Jiun

Chübee Murata

Was diese kleine Abhandlung bezweckt, ist, die historische Bedeutung Jiuns, eines buddhistischen Priesters der Neuzeit, der oft Jiun der Heilige genannt wird, und sowohl in der Wissenschaft als auch in der Tugend groß war, in den folgenden drei Punkten klarzumachen.

1. Das Ideal seines ganzen Lebens; seine Methode und Bemühungen, um dieses Ideal zu verwirklichen.

2. Insbesondere seine Methodik und sein Erfolg auf dem Gebiet der buddhistischen Sanskrit-Philologie.

3. Die Siddham-Philologie als eine Hilfswissenschaft der buddhistischen Lehre hat in Japan ihre lange Tradition und ihre eigenständig entwickelten Formen. Jiun war ihr Vollender vor der Meiji-zeit. Sein Einfluß auf die Entstehung und Entwicklung der japanischen Sanskrit-Philologie indem Jahrhundert seit der Meiji-zeit unter dem Einfluß der europäischen Sanskrit-Philologie war nicht gering.

Der Verfasser, der wie Jiun auch in Osaka geboren ist und sich das Studium der Sanskrit-Philologie und Indologie zum Ziel setzte, will ihm in dieser Abhandlung, die Ehrfurcht, die er ihm seit seiner Jugend entgegenbringt, dadurch erweisen, daß er sein wertvolles Leben und seine Werke—freilich unzulänglich genug—ans Licht bringt.

1. 緒言

慈雲の梵学に就て述べるに当り、先ず明確にして置きたいのは、慈雲その人に就てである。慈雲その人の全貌を知るための根本資料としては、真言宗僧正長谷宝秀師の永年の苦心によって編集された「慈雲尊者全集」が、今日と雖も依然として最大最適の文献であろう。この全集は、慈雲の後半生に最も因縁の深い葛城山中腹の高貴寺から大正11年以来同15年に涉り発行されたもので、全18巻（19冊）。さらに昭和30年に補遺1巻が追完されたので、全19巻20冊である。次に、

慈雲の梵学を知るための第1次資料としては、高貴寺の宝蔵に今日尚、写本の儘で収蔵されている「梵学津梁」が根本的なものと申すべく、その概要は僅かに全集第9巻下に収載の「目録」によって窺知し得るのであるが、内容の一斑は全集第9巻上の悉曇字記聞書、普賢行願贊梵本、同諸訳互證、第9巻下の普賢行願贊聞書、理趣經講義等によって直接に知ることが出来る。さらに昭和28年、尊者150年遠忌記念事業の一つとして公刊された「慈雲尊者梵本註疏英華」一帙がある。これは高貴寺に蔵する梵学津梁の一部を原形に忠実に複製した「天龍八部讃」「法身偈」「十一面讃」「自受用」はじめ、既に印行された「梵篋3本（阿弥陀經、行願贊、心經）」「理趣經講義」も複製出版されている。公刊された第1次資料は大体以上の如くで、他には、慈雲の墨蹟「摩多体文」を折本で復刊したもの（河内三密会刊）1巻が昭和34年に、又同38年には木南卓一氏の編刊による「慈雲の書」1巻がある。木南氏には36年刊の「慈雲尊者、生涯とその言葉」1巻があり、現在、入手し得る最も好適なる慈雲伝記、且つ入門書と評してよい。（京都三密堂書店刊）。慈雲研究の原資料は以上の如くであるが、各方面の慈雲研究論文、乃至讃仰の講演筆録の類は枚挙に遑なく、以下、所要の箇所これを引用するにとどめたい。

2. 略 伝 前 半 生

慈雲、名は欽光（オンコウ）、字は慈雲、百不知童子、雙龍叟、葛城山人などの号がある。俗姓上月氏、播州赤松氏（源姓）の血統で、遠く人皇62代村上天皇第7皇子具平親王に始まるといいうが、慈雲の父、上月安範から大阪に移り住み、慈雲は大阪中之島、讃州松平侯の蔵屋敷なる外祖父の役宅にて出生した。時に江戸中期の享保3年(1718A.D.)7月28日であった。文化元年(1804A.D.)12月22日夜、京都西郊、阿弥陀寺に於て寂す。87歳。父安範は性格に任侠の風あり、財を輕んじ、義を重んじたが、正規に仕官せず浪人のまま、一生を大阪で終った。慈雲の母、桑原氏（一説に菅原氏）は阿波徳島の産、親族川北又助の養女となり、又助、高松侯に仕えて大阪藩邸に勤務し、前記安範と相知るに及んで、その義気あるを喜び、養女を配するに至る。その間に7男1女あり、慈雲（幼名・満次郎、のち平次郎）はその第7男であった。13才まで両親の膝下に育ったが、その年父死し、その遺命により、母の尊信篤かった大阪南郊田辺の法樂寺（真言宗）忍綱貞紀に就て出家す。貞紀は慈雲14才の時梵字の初歩を教授した。「悉曇相承」として法脈の伝承ともなるのである。この貞紀は後年の慈雲の学徳の基礎を培った師として重要な人物である。少年慈雲は仏法を好まず、両親の命だからやむをえず出家したが、師の貞紀には敬服していた。15才の時に深い宗教的靈感に打たれ、それ以後、真剣に仏法の学と行とに志すに至ったという。師命により京都の堀河塾、即ち伊藤東涯の門下に入って漢学を修め、河内大和の古刹に遍歴して、伝統の仏学を継承するに努めた。22才にして短期間ながら法樂寺住職となり、27才にして東大阪高井田の長栄寺住職に転じたが、その間、信州に大梅禪師を訪ねて、参禪に努め、禪学が終生、慈雲の教学と人格に大きな助縁を与えることとなった。30才前後には慈雲の生涯の根本方針ともいふべき「正法護持」精神が確立した。即ち仏教は元來釈尊に出でたものであるから、釈尊当時の仏教が即ち正法の基礎たるべきものである。釈尊は令法久住のため、僧団に戒律を授けた

が、江戸時代の日本仏教界は特にこの戒律の点に於て、極めて墮落した状態にあったので、慈雲は先ず釈尊に帰れの第一歩として「正法律」の復興を提唱し、「根本僧制」を定め、僧の袈裟を古式に復すべく「方服図儀」を著し、さらに、インドに律蔵を求めて旅行した唐の義浄の名著「南海寄帰伝」に対する註釈書「^{グレンショフ}解纜鈔」を撰述した。その他神道と儒教の比較論ともいふべき対話体の「神儒偶談」をも、大体30代から40代にかけて著わしたといわれるが、これには一部に疑義もあるようだ。神道について、晩年の慈雲はいわゆる「雲伝神道」「葛城神道」の創始者として知られている。

41才のとき、生駒山の西麓額田に近き長尾の滝のほとりに、草庵を結び、双竜庵と名付けて、14年間坐禅と勉学に大半をすごした。挿画看。特にこの期間に於て、梵学の研究に専念し、その結果、有名な「梵学津梁」1千巻の体系と編集の大半がこの期に於て実現したのである。委細は後述するが、釈尊に帰れの精神が、戒律の復興から梵語原典の解明へと歩武を進めたもので、江戸中期の澎湃たる復古思想の波瀾は青壮年期の慈雲の学問に於ても脉動していたのである。契沖、宣長にみられる国学研究、慈雲が学んだ古義堂の仁斉東涯にみられる論語に帰れの復古儒学と並んで、慈雲の梵学研究は、仲基の原典批判学とは方向、方法こそ異なるが、孰れも後代の歪曲を排し、原始の真相を求めんとする点では目的を同じくしたものであった。

慈雲の生涯は、研学と教化の渾然一体の一生で、しかも名聞利養に恬然たる心境が一貫しているが、これには、その師貞紀の感化、父安範の義を重んじ利を軽んずる気骨、母の孟母にも優る薫化が与って力があったものと考えられる。その母が若き日の慈雲に与えた次の書状の如きは一読襟を正さずにいられぬものがある。

3. 慈母の訓戒

朝夕ひえびえしくなり候へども、愈おかはり無く御入りなされ候よし、何より嬉しく存じ参らせ候、然れば聴衆御方より起信論の読講御願の由に候へども、未だおすぐれなされず候ゆゑ、先御承引も御座なきよし、御尤もに存じ参らせ候、此儀はたとひ御病氣すきと御快く御入候とも、お受けは御無用と存じ参らせ候、そうたい講釈を発企のお人に従ひてなされ候ては、経終れば論、論終れば律と、次第に相つづき、是ぞと申す限りなく、一生講釈坊主になりて終る物にて御座候、我身の了見ならば此のたびの病気を因縁となされ、是より事を省き縁を退け日夜作善修行をお心がけ、自ら生死を解脱し、此解脱を以て人をも利益なされ、我身の善所御誘引候へかしと、朝夕ねがふ事に御座候。

(原文は、新村出博士が「文字を多少よみやすくしつつ抄出」されたものを、新村出選集第3巻318頁から引用した。)

4. 略伝 後半生

慈雲は雙竜庵に隠棲中も、長栄寺その他の講席で、門弟の指導、有縁の信者への法話のために

しばしば下山されたいことは、この隠棲期に著はされた示衆・垂示によっても推定できるのであるが、母の訓戒の如く「講釈坊主」になって生涯を送ることは勿論慈雲の素志ではなく、山中にあって禅観と研学に専念することが、慈雲としては最も貴重な生活であったであろう。

慈雲の50代から87才で寂するまでの後半生は、前半は阿弥陀寺時代、後半は高貴寺時代とさらに兩分してもよいが、54才にして信者の屈請を容れて、京洛西郊の阿弥陀寺に住するに至って、洛中洛外の貴賤道俗に教化を与え、遂に御所にも請ぜられて、再三の固辞を経て、桃園帝の皇后恭礼門院と帝の生母開明門院に十善戒を授くるなど、慈雲の教化は続いたが、開明門院の懇請によって授戒に参内した時の模様を次の一文にみる。(木南卓一氏著「慈雲尊者」32頁)「門院より御使をもて和上を請し給ひけれども固く辞して参り給はず、御使あまた度になりになしかば、今はいなみ申さん事もかたしとてをさをさ承諾し給ひぬ。さてまう登る日は壞色の大衣のあらあらしきを着し、随弟兩三人に瓶鉢を執らしめらる。御車寄に行きつきてわらぐつ竹の皮笠をぬぎ置きて直ちに昇殿し給ひけり。かかる洒々落々の高風は千古にも亦稀なるべし」(水渠師中興奉律縁起の一部)

慈雲の代表的著述とされる「十善法語」12巻はこの在京約5年間の成果である。天子は万乗の位、天神地祇を祭るべき皇統を継がれ、仏者に戒をうくることは当時の事情として避けられたと推定されるが、御生母開明門院は、それに代って慈雲から十善戒を授けられ、かくして慈雲は、鑑真以来の授戒の帝師の地位を間接的ながらも得たことになるわけであるが、その十善戒の意義を仏教の戒定慧三学並びに、神儒を含めた総合的な東洋倫理として、平易に口述したものを弟子有縁者の手で草稿となし、再三、自筆による補正改修を経て、58才の秋に完成した。日本の仏教思想史上「十善」を中心課題として倫理思想を展開したのは慈雲を以って第一人者とする。一般に当為^{ソルレン}の掟として理解されている倫理を慈雲は「この人あってこの道ある。外に向って求ることはない。人々具足、物々自爾」(十善法語)と見る。

偕、京洛は各宗の本寺本山が犇めき、宗派争いの中心地でもある。超宗派的な立場に立つ慈雲としては、長くとどまるべき土地ではない。殊に再三の召命の結果とはいえ、御所に出入する身となつては、累の及ぶところも畏れ多い。空海が晩年高野山に隠退した蹤蹟に学んで、高貴寺にその晩年を送る決意を表明したものと思われる。当時の心境を述べた操山尼宛の書翰にいう。「慈雲ことその徳もなく、また世に交り候ことも本意ならず」「元来山中にて木石とともにくちはて候やうと若き時より思ひ定めをり候」とある。

高貴寺に移り住んで約30年の月日を送ったが、その学問と修行とには孜々として倦むことを知らず、依然として衆生を摂化した。文化元年(1804 A.D.) 87才の夏を越した頃、健康を害し、治療の為、京都に移ったが、その冬12月22日、遂に入寂した。弟子たち悲泣しつつ遺骸を奉じ、夜を徹して高貴寺へ運んだ。今も同寺奥之院大師廟の傍に墓域がある。思うに慈雲の生涯は、真言僧として当然かもしれないが、宗祖弘法大師空海の芳躰に学んでいたのではないか、24才にして三教指帰を著した空海の釈李孔の思想の浅深を論じた風格は、慈雲の神儒偶談のそれに通ずるものがあり、空海出家当時の日本の仏教界の墮落は、慈雲出世時のそれとよく似てをるし、空海の入唐求法に比すべきは、生駒山中14年の梵学研究であり、弘仁7年、空海42才にして「高野の

空地」を望み請うたのと、正法律の道場として、又その一宗を公許されて単独本山となった高貴寺に於ける慈雲との共通点も又、否定出来ない。

尚、人と学問は不可分であり、この観点から、まだ指摘すべき伝記事項は多く残されているが、不備を残して本題に入る。

5. 梵 学 津 梁

慈雲の学問は大別して仏学、漢学、国学の三部門に分れるが、仏学はさらに顯・密・禪・戒に分れ、仏学全般に渉る十善法語の如き通仏教、乃至梵語学、悉曇学といった真言密教と不可分の部門も、広義の仏学である。漢学は儒学と限らず易経、老莊の学にも造詣深く、作詩、作文等、文雅詞藻の面も又、漢学に含まれる。

国学は前二者に比し、必ずしも慈雲が専念した学問とはいえないが、晩年雲伝神道を創始した位だから、その素養は実に深いのである。更に和歌和文もこれに含まれる。慈雲の梵学は以上の如き広汎な学問領域の一分野にすぎないわけであるが、しかも尚、日本梵学史上、未曾有の業績を示しているのである。以って彼の学問の偉大さを知るに足るであろう。

日本の「梵学」は、必ずしも、近代的な意味での梵語学と称し得ず、所謂「悉曇学」と呼ばれて特異な成立と発展を示し、慈雲に至って悉曇学は、近代的な意味での梵語学へと一大転換をなすのである。

慈雲の学問的態度は、その不偏性、その大観的なとともに、その徹底性によって讃仰されているが、梵学をして、旧来の姑息曖昧な状態から脱皮させたのは、一に彼の徹底性による。大観、達観を誇称する者は、往々にして粗枝大葉の弊を免れぬのが通例であるが、慈雲は実に周到綿密、正確厳格な態度を終始堅持して、しかも大局の把握にすぐれ、雄大な体系の許に梵学津梁1千巻を編成したのである。

梵学津梁1千巻は前述の如く生駒山中雙竜庵に10余年の隠棲中に、専ら資料の蒐集と整理、分類と比較、体系的組織へと努力されたものであり、七部七詮に分けてその体系は慈雲の独創にかかるものであるが、西洋近代のフィロロギーの方法と対比して、何ら遜色を認めぬのみか、その先蹤なき独創性に於て一步抽ん出ていると評すべきであろう。

即ち七詮とは第一、本詮。第二、末詮。第三、通詮。第四、別詮。第五、略詮。第六、広詮。第七、雑詮である。石浜純太郎博士の所説（「慈雲尊者梵本註疏英華」解題五頁）に依れば、第八、外詮なる分野を設けたる「ある目録」が存在し、「八部八詮。これは悉曇の雑書を収めているが、別詮雑詮と混乱している。別詮から一部の外詮を抽出按排しようと試みたことがあるのだろう。」とあるが、内容が、別詮雑詮からの抽出にすぎないのであれば、慈雲自筆目録の「七詮」に従うのが、穩当であろうかと思う。

さてこの七詮の分類法については、慈雲自身次の如く規定している。「本詮者録諸具文也、末詮者解其本也。通詮者声明所要。別詮者古今諸師撰集。略詮者略標名句。広詮者委悉解釈。雑詮者摺摭示要。及諸異途等。總撰名曰梵学津梁。」（七九略鈔卷1）

即ち本詮とは根本資料の蒐集である。在来日本に伝わる梵本は大小を問わず極力探索して、ここに収めようと試みた。末詮とは本詮に収められた梵本の対訳、乃至梵語仏典訳読に資する漢訳経文の相互比較を試みたもので、慈雲一門の研究成果を示し、即ち諸訳互証と呼ばれる部門である。通詮は文典に該当する部門である。綴字法文法など梵文の語学的研究に必要なものを集め、在来の文献のみならず慈雲及び一門の研究成果をも含む。別詮は在来の悉曇学の著作を集めるが、通詮と別詮とは目録の上では若干の混乱がみられる。略詮と広詮とは要するに辞書乃至事典に相当するもので、略詮は梵語の字母順に梵語の単語を排列せんと試みた謂はばコンサイス辞典であるに対し、広詮は字典には変りないが、字母順によらず、項目別分類で、在来行われていた節用集的な分類法だと見ればよい。但しこの計画が、どの程度完成したかについては、高貴寺所蔵の写本について確めなければ確言出来ない。雑詮は上述の六詮のシステムが確立されて後に、追加増設されたものかと推定されるが、印度の地理歴史その他、今日我々がインド学の領域と考えている部分であって、驚く可きはインド以外の外国文字まで当時知られる限りのものは、ここに蒐集しようと試みていることである。

以上の分類法は実に文献学の精要ともいうべきもので、先ず原典を蒐集し、整理する。次に原文の解説に必要な在来の訳文を集め、原文と比較対照する。原文を解説するには文法と辞書の必要は勿論だが、現在我々が用いている如き科学的に正確なものが欠如していた当時^に於て、在来の書字の学にすぎなかった悉曇学の類書を極力集める半面、漢訳仏典の各所に散見される文法的解説をも拾い集めて、何とかして梵文読解に役立てようとする。この試みたるや、全く頭の下る思いである。語彙の集成は文法に比すれば多少容易であったかもしれないが、在来の梵語辞書は質に於ても量に於ても到底、原文の翻訳に役立つ程度のものでないから、本詮と末詮との対照過程で判明した原語と訳語を一つ追加しつつ辞書をつくらねばならないわけである。雑詮に至っては、言語それ自身の翻訳から一步進んで、その背後にある文化の様相を探究せんとする試みである。材料さえ充分に揃えば、雑詮はインド学百科全書ともなるべき部門である。慈雲はあれ程の大学者であるが、自から「百不知童子」と号した。童子とは一生独身で精進した人と呼ぶので、必ずしも年令に関係ないが、慈雲は生涯不犯の戒を守り、且つ孜孜として終生研究に従った文字通りの童子で、百不知は、「いろいろまだまだ知らないことばかりです」という寓意であるが、知らざるは知らずとせよで、生半可な^{なまはんか}会通を試みて、後人に笑われることをさけて、周到綿密な七詮方法によって、梵文解説の高山を踏破せんと試みた彼の謙虚にして熱誠なる態度こそは、学者の範とすべきものであろう。

紙幅の制限上、これ以上に詳細な紹介は省くが、不日、本詮のみでも、委細を尽す予定である。既に部分的ではあるが、高貴寺住職前田弘範和上の御好意に依り、本詮の写真撮影を許されたものも手許に保存している。後学の一人として、不日果さねばならない責務と思っている。

6. 悉 曇 学

大日本仏教全書の中に「悉曇具書」1巻（大正11年刊）が輯められているが、その巻末に高楠

順次郎博士が「悉曇撰書目録」1巻と題し、その内容は日本梵学史の概観と本邦所伝の文献解説を試みてをられ、斯学の貴重な指針である。さらに高楠博士と渡辺海旭博士、小野玄妙博士の協力を根幹として公刊された大正新修大藏經全100巻の中でも第49巻から第52巻に及ぶ史伝部、第53巻、第54巻の事染部、第84巻所収の悉曇部は、中国伝来の日本悉曇学史を知るに足る第一次資料である。研究書としては馬淵和夫博士の「日本韻学史の研究」3巻が日本學術振興会から刊行され、戦後の斯学研究に新紀元を画した。その他、昭和19年に公刊された田久保周營氏の「批判悉曇学」全2巻がある。尚、中村元博士「東西文化の交流」24頁以下参照。

詳細は以上の諸文献に譲るが、嘗て松本文三郎博士が述べられた如く「仏教渡来して千数百万年、教義の研究は頗る盛んであったが、仏教の聖典語たる梵語の研究は殆ど全くこれを欠除し、最近明治時代泰西の學術の東漸するを俟ち、之と相伴ひ初めて勃興するをえた。一見奇怪なるが如くして而もまた当然の現象であった。（中略）我邦に幾分なりとも印度の文字若しくはその発音の伝承するに至ったのは支那仏典中、諸処に翻訳せられざる印度語言の存したがためでもあろうが、寧ろ直接には、陀羅尼解釈の必要からであったのは、疑いを容れない。殊に陀羅尼は密教学者の最も重要とする所であるから、勢い印度文字の発音や字義に関する多少の知識が欠くべからざることとなったのである。これが我邦に悉曇の伝来するに至った抑々の始めである。それ故に悉曇は密教とともに伝はり、密教家の相承する所となり、他の仏教家は殆ど全く之を顧みなかったのである。斯く古代仏教家は陀羅尼の読誦と解釈との必要のみからして悉曇を学び、現代梵語の研究者とは全然その目的を異にしたのであるから、悉曇の比較的早く我邦に将来せられたに拘らず、千有余年後の明治時代に至るまで梵語学の盛んなるを得なかったのである」（松本文三郎著「先徳の芳躰」昭和19年刊。409頁以下）。

たしかに日本悉曇学の成立と発展の由って来るところを適切に述べた言葉で陀羅尼即ち密呪の梵文は、神秘的で不可解なところがむしろ宗教的な有難味なのであるから、梵字梵音を学んでその発音が出来さえすれば良く、語義文意の解釈は、むしろ不可解な状態に放置した方が、好都合だったのかも知れない。しかし平安朝の初期に我国に中国から本格的な密教を伝えた天台、真言の学僧たち所謂「入唐八家」と称せられる代表的人物の中には長安の都などに於て、直接に印度僧から梵語の伝授をうけた人もいたので、たとへ学力の程度は不明にせよ、決して不可解の儘で伝承したのではなかったのである。最澄は知らず、空海は在唐3年の間闍婆の般若三藏に悉曇を学び、梵夾を授けられ、将来目録にも悉曇関係の書があり、空海自身「梵字悉曇字母釈並釈義」1巻その他の著述もある。柳亮三郎博士はその講演筆録、「弘法大師と其の時代」（昭和22年版）94頁に於て「また善く世人に問はるる事であるが、大師は梵語を知られたか否やと云ふ問題であります、梵字梵語を講習せずして真言密教は完全に領解出来るものでなく、また不空三藏の上足の弟子たる恵果が、梵語梵字を知らなかった大師を伝燈阿闍梨の位に上すとは思へぬが、世人の中には往々かかる疑問をなすものがあるから説明しますが、大師は立派に梵語はやられたので、御将来目録の序中に「梵語梵讃間以学之」と記せられて居る。「間」とは大師謙譲せられた言で、当時梵学の研究が中々盛大であり、斯学の才俊が多く居った唐の長安に入りて、大師たるものが如何にして此の必要学科を等閑視することがあり得べきか、畢竟講習日浅く、長安の才俊に

比すれば、大師自身が劣ると思はれたから、「間」の字を入れられたままで、講習日浅かったにしろ、今日の学生の様に五年、六年とかかってだらしなくやったのではないから、大師の梵学上の著述なり、意見なりを見ると、一点の誤謬はありません」として、十住心論巻7から「文珠自証真言」に対する空海の解釈を引用して詳密に証明してられるが、空海以外にも天台宗の円仁（慈覚大師）円珍（智証大師）などの入唐諸家は、たしかに梵学の素養を得て帰朝したと思われる。

その後の我が悉曇学の歴史は、かかる入唐諸大家の勉強と伝習にも拘らず、実質的には殆ど進歩なく、漸く江戸中期に慈雲という英才を得て、復興の機運を迎えたとはいえ、本格的乃至近代科学的な梵語学は明治維新以降に俟たねばならなかった原因は、叙上の松本博士の指摘された点も、たしかに一因たるに相違ないが、根因は西紀9世紀末の遣唐使廃止以来、19世紀後半に至る10世紀間の我が鎖国状態にあった。如何なる英才と雖も、語学をやるのに、文法辞書の備えがなければ成功する筈はなく、それが鎖国のため舶載されず、況んや渡印入竺して彼地で学ぶ事が出来なければ、正に万事休すである。その悪条件の中での慈雲の努力は誠に偉大である。慈雲の梵文解説について、二、三の点を挙げると、唐の玄奘の高弟窥基の唯識枢要とか、玄奘伝たる「慈恩伝」などに見ゆる不備な梵語解説乃至義浄の寄帰伝中の言及を手がかりとして努力された跡が窺われるが、主格と対格の混同、副詞と名詞の混同、特に名詞の語性の相違と格語尾の変化との相関性に気付かぬ為の誤謬、動詞人称語尾、乃至時称、語法の複雑なる梵語文法知識の欠如が、惜しまれてならない。第一人者慈雲に於て既に然り、況んやそれ以前の悉曇諸家に於ては、警告するまでもない。要するに日本の悉曇学は、梵字の書法と発音の学であり、その教科書は大体に於て、智広の「悉曇字記」1巻であったと云ってもよい。字書類としては義浄の「梵語千字文」、全真の「唐梵文字」、礼言の「梵語雑名」入唐印度僧の「唐梵両語雙対集」景祐の「天竺字源」等が主なものであるが、本邦撰述の字書をも含め、字書に就ては別の機会に譲りたい。

7. 慈雲梵学の影響

明治開国とともに、西欧に於ける梵語研究の状況が明らかにされ、日本の梵語学界も長夜の眠りから目覚めたわけであるが、慈雲の梵学津梁本詮の中に蒐集した本邦伝来の梵本が、測らずも世界の印度学、梵語学、仏教学界の注目を集め、先ず東本願寺の留学僧南条文雄、笠原研寿両師の縁でオクスフォード大学のマクス・ミューレル博士は、慈雲寂後その門弟によって発見され本詮に加えられた梵文金剛般若経を日本から得、中国所伝の梵本と校合してオクスフォード逸書アーリアシリーズの第1冊として公刊（明治14年、1881年）したのを皮切りに同じシリーズから、1883年に慈雲が天明3年（1783）公刊した梵篋3本の中から梵文阿弥陀経を南条博士と連名で大無量寿経梵本とともに公刊、その翌年（明治17年）には「古代貝葉」と題して、遣隋使小野妹子の将来といわれる法隆寺貝葉二葉から、般若心経、大仏頂尊勝陀羅尼の梵文を校正出版した。梵文は法隆寺貝葉の他に、浄厳手写本、大和長谷寺所伝本なども含むが、以上は日本の梵学が世界に贈った貴重な原典であり、日本の梵語学者としての慈雲の果した功績や絶大である。

さらに遅れて、高楠順次郎博士が南条博士の芳躅を追ってオクスフォード大学のマクス・ミューレル教授の下で梵語を研究し、笠原師が一部着手した跡を承けて義浄の南海寄帰伝の英訳を1896年、オクスフォードから出版したが、高楠博士自身、慈雲の南海寄帰伝に対する註釈書「解纜鈔」が坐右になれば恐らくこの英訳は実現しなかったであろう。これ又、慈雲の後代に残した功績の一つである。

さらに慈雲が最も心血を注いで講述した梵文普賢行願贊（全集第9巻に所収）は、浄土宗の渡辺海旭博士がドイツのストラスブルグ大学のエルンスト・ロイマン博士の許で永年梵語梵文学を研究中、学位論文として梵文原典の公刊と併せて出版した。1912年のことである。即ち次の如し。Die Bhadracarī, eine Probe buddhistische-religiöser Lyrik untersucht und herausgegeben——Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultät der Kaiser Wilhelms-Universität zur Strassburg vorgelegt von Kaikyoku Watanabe aus Tokio, Leipzig Druck von G. Kreysing. 1912.

このように明治末までに、日本所伝の梵本仏典は、順次世界に紹介されて行った。

8. 結 語

以上、簡単ながら、慈雲の略伝と業績を通じて、その学徳兼備の高風を偲んだのであるが、江戸中期に生れ、当時の仏教界の安逸と惰眠の風紀を、戒律の復古によって振起させようとし、正法律を唱え、表裏なく自から実践したのみならず、その復古思想は漢訳經典にあき足らず、梵語原典に於て仏教を再認せんと、これまた長夜の惰眠に陥入っていた悉曇学の旧套を打破して、梵学津梁1千巻に代表される慈雲梵学を、その一門とともに樹立した。さらに京洛に入って貴賤道俗に十善法語を説いて、「正法」即「十善道」即「人となる道」の平易な教化を社会に普及した。

慈雲梵学が、明治以来の我が梵語学を世界的ならしめた点で貢献した事例も若干ながら述べた。これを以って一先ず小論を終る。

(47. 8 .31稿了)